

てします。

紛争対策委員会ではその後、組合の「機嫌とり」のため、管理者に暴行を働くなどの刑事犯で解雇された職員まで大量に再雇用することもやっている。

沈思熟考して、戦後史の『天下の莫迦者』を数えあげるとき、その筆頭に、四十数万人の組織を腐敗、堕落させ、国鉄という国民財産を破産させた磯崎の名をあげざるを得ない。

あつという間の出来事だったが、森山は事の重大さを理解し、ただちに対応策に乗り出した。が、時間はもはや元には戻らなかつた。

「このとき、他の二公社五現業に波及することが心配でした。そこで他の二公社五現の理事や関係省庁の担当者を集めて『こんなことをやつていたらいいへん』だ。どうか諸君、頑張ってくれ』といつたら、郵政省の人事局長だった北君という男が『飛火はしても延焼はさせません』といった。しかし、現実には飛火もしたし、延焼もしましたね」

自分の目前で国鉄崩壊の『除幕式』が行なわれたこの事件は森山にとって、まさに無念の思い出となつた。経営と労働問題は不可分のものだが、その認識は自民党内にはいまでも意外なほど薄い。森山が最後まで目を光らせたり、重宝がられたゆえんだろう。

余談になるが、森山は磯崎に首を切られた真鍋元職員局長を、自分の地元の企業に招き、その後名古屋臨海鉄道に転身したのちも、亡くなるまで親しく付き合つていた。森山のある一面を物語るエピソードである。

第十五章 太郎——その死

痛恨の日……

昭和四十八年一月二十八日は森山家人達にとって、生涯忘れ得ぬ痛恨の日である。この日、一人息子の太郎が不慮の死を遂げた。森山はこの日のことを人に語ろうとはしなかつた。真弓の口もまたきわめて重い。そのことがかえつて二人の悲しみの大きさを物語つている。

神奈川県横浜市の北部、町田市に近い緑区の丘陵地帯に建つ私立桐蔭学園。中、高一貫教育のこの桐蔭学園は私立名門中の名門校だ。一流大学への進学率が極めて高い一方、夏の全国高校野球には昭和四十六年と五十九年の二回、神奈川県代表として出場し、四十六年には全国優勝するなど、文武両道に秀でた学校として名を知られる。

その桐蔭学園の校庭の片隅に、小さなお地蔵さんがひっそりと立つていて。名付けて『太郎地蔵』という。すでに十五年の歳月が流れたが、柔道の公式試合中首の骨を折つて死亡した太郎（当時高



6歳の太郎とくつろぐ森山
(昭和38年1月)。

校一年)を悼んで建てられたものである。

姉の真澄と妹の真理にはさまれた太郎は森山夫妻にとつて、たつた一人の息子だった。当時の新聞記事によると、柔道部員だった太郎は四十八年

一月二十八日、横浜市中区にある神奈川県立武道館で開かれていた横浜市高等学校体育連盟柔道部主催の横浜地区高等学校柔道新人戦大会に出場した。その試合中、午前十一時二十五分ころ、相手に大外刈をかけた時、返し技をかけられ、畳にまっさかさまに落ちて首の骨を折り死亡した。このとき太郎は十六歳と四か月。まさに青春の真っ盛りだった。

幼少のころから機械いじりが好きで科学、宇宙に興味を持ち、口数が少なく、一見もつさりした子供だった。がつちりとした体格で、いつもニコニコと人なつこい笑顔を見せ、誰からも好かれていた少年だった。カレーライスとラーメンとコーヒー牛乳が大好きな高校生だった。

この日茨城と栃木にそれぞれ所用で出掛けている森山夫妻が極に横たわる太郎と対面したのは横浜市大付属病院の一室である。このとき森山はたたひこと「太郎！」と叫んで絶句したきりだつた。その痛恨と悲しみはいかばかりだったろう。

太郎の死について森山は「『太郎』を読んでくださいよ」と追悼文集を差し出すのみで、それ以上

は決して語ろうとしなかった。この文集の編者は森山真弓。内容は森山夫妻、真澄、真理姉妹はじめ、小、中、高校時代の友人、学校の先生、小さいころ太郎の面倒を見たお手伝いさんや掛りつけの医師、近所の人たちが綴った思い出に加えて、葬儀でのあいさつなどが収められている。

その中で森山はこう述べている。
「太郎の急逝は私共一家にとってまことに大きな衝撃でありまして、この気持ちはどういい表わしてよいかわかりません。人生七十年という今日、わずか十六年でその一生を終ったということは、親としてまことに不びんであります。

小さい時はアレルギー体質とかで、湿疹や小児ぜん息に悩み、ずいぶんお医者さん通いをしましたが、十歳くらいからすっかり丈夫になり、今は全く健康な体で、私よりもはるかに大きく、身長一七五センチ、体重七二一三キロの体格に成長していました。成長する過程でいろいろのことがあり、思い出の種はつきません。

私の教育方針は、雑草教育といいますか、特別な学校にやらず、その中でたくましく成長してもらいたいということでありましたので、義務教育までは近くの世田谷同胞幼稚園、世田谷区立山小学校、北沢中学と進みました。しかし高校は、特に男の子にとって人間形成の大重要な時期にあたっておりますし、近來の教育界の状況から、教育方針に納得のいくところということで、桐蔭学園にお願いしました。

生来、明るく、素直で、善良で、姉、妹ともほんとうに仲良く、私共にもやさしいよい子であり

ました。が、呑氣で無頓着で学校では忘れものの名人だったようです。また、どちらかといえば不器用であり、諸事ゆっくりとした方でしたから、スポーツといつても柔道のようなものならと、母親のすすめで小学校の頃少し習ったこともあって、高校では本人が柔道部を選んだようあります。試合の前夜、はじめて公式戦に出してもらえるというので、喜び勇んでおり、いつになく口数多く、必ず勝つんだといって張り切っていたそうであります。

一月二十日、二十一日の週末に帰ってきたのが（太郎は学校の寮に入っていた）、私共の見た元気な姿の最後でしたが、日曜日の午後、例によって食料をいっぱいに入れた紙袋をもち、少し早目に寮へ帰るというので、私がその紙袋をもって新宿駅まで京王電車で送つていってやりました。一人だけで歩くということは、他にほとんど記憶がないほど珍らしいことでした。新宿駅の小田急線の切符売場で私が時間をきいたところ、太郎は時計を忘れてきたということに気づき、あわてました。それは自分の時計がこわれたというので、私のをやろうと前の晩に渡しておいたのでした。とりにかかる余裕もありませんので、ちょうど私がその時使つていた懐中時計を貸してやり、太郎のズボンの腰に私がつけてやりました。亡くなつたあと見ますと、試合場まで着ていた制服のズボンにそのまま時計がついておつて、時を刻んでおりました。私の身につけていたものが、最後の一週間余り、彼の身につけられていたのがわずかな慰めであります。

一月二十八日、不幸な事故にあいまして、全く思いがけない別れをすることになりましたが、太郎が十六年の生涯を、周囲の皆様にかわいがつていただき、楽しくせいっぱい生きまして、格別

の痛み、苦しみもなく、一瞬のうちに天に帰しましたことは、せめてもの幸せであります。太郎の肉体は滅びましても太郎は私共の心の中に生きております」

森山の、太郎を思う心情が、読む者的心に突き刺さるような一文だ。

忽然と去つた長男・太郎

次は真弓の「あの日」と題した一文である。

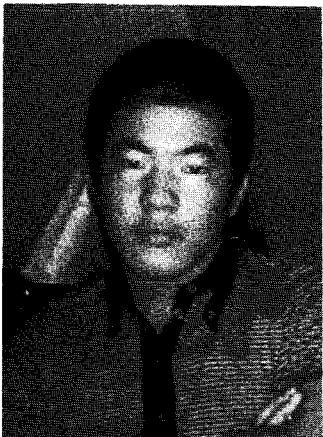
「昭和四十八年一月二十八日の日曜日。

新聞の朝刊は『ベトナム和平協定に調印、けさ九時に停戦発効』という大見出しが出ていた。

私は、宇都宮で十一時によく人と会う約束があり、朝早く出かけた。用事は簡単なことだったから、すぐ折返し帰る予定で、早ければ宇都宮発十一時三十三分の急行に乗れるかも知れないと考えていた。話をしている間にいつの間にか時がたち、ふとそばの時計を見ると、すでに十一時半をさしていた。私はそれを見ながら“ああ、急行は行つてしまつ……”と思つた。

代田橋の駅から家までの途中に、お葬式があり、人が大ぜいたたずんでいる真中を通らねばならなかつた。少しきまりが悪いと思いながら“どなたが亡くなつたのかしら、お氣の毒に”と思つたのがはつきりと思い出される。

そこからわずか數十歩。自宅の玄関の戸を開けて、はじめて自分自身に起つた出来、ことを知つた。そしてさらに三時間後、茨城県の出先きからかけつけた夫と一緒に、横浜市立大学病院の解剖室で、



森山太郎、高校1年生(昭和47年8月)。

すでに柩にはいって横たわっている太郎に会った。

私が彼を抱こうとして頭の下に手をさし入れると、指の間に、丸刈りの少しのびた髪がやわらかくはさまれ、頬ずりをすると、まだ生あたたかい体温が私の頬に静かについたわった。

解剖が終つたのは八時頃だろうか。死亡時刻は十一時半と書いた死体検案書をしつかり握りしめ、太郎の遺体と一緒にワゴンに乗つて、オ三京浜をひた走つた。

ああ十一時半！ 私が時計をみて急行が出ていつてしまふと気にしていたあの瞬間。実は太郎の魂が「僕もう行つてしまふよ……」と私を呼んでいたのかも知れない。

私は柩のふたの上に掌をおいて彼に語りかけた。

「太郎ちゃん、あなたが十六年間、私に息子を持つ喜びを与えるためにだけ、この世にある運命だつたとは……。大人になる悩みを持つことなく、またその過程で母親に必ず味わわせるに違いない心配や淋しさをもたらすことなく、忽然と立ち去つてしまつた。他の誰のものにもならず、自分自身にさえもまだなり切らぬままだつた、私の太郎ちゃん……。」と。

帰宅すると、ニュースで聞いたといって、早くもかけつけて下さつたたくさんの用問客やお手伝いの人々。私は自分の体がちょうど線描きの絵のように、全くうつろな輪郭だけになつて、前から後から風がひゅうひゅうと吹き抜けているような気持ちであつた。そしてただ口と手足を忙がしく動かしているだけだつた。

真夜中になつて、皆さん引き上げられると、寒中の夜の厳しい寒さと、鉛のように重苦しい悲

しみとが急に八方から私に強く迫つて来て、ぬけがらのようない私の体をおしつぶしてしまひそうだつた。

四日後、浅間山が十一年ぶりに大爆発した……

あれからすでに十五年が経つた。しかし歳月は森山夫妻の悲しみを少しも柔らげてはくれなかつた。

真弓はこう語る。

「これまでの人生の公私を問わず、一番大きいショックでした。選挙で落選するとかそういうことはまったく質がちがうんですよ。落選もショックですが、このつき頑張れば、と考えればいい。でも子供の死はどうはいきません」

森山夫妻はその後、毎年、太郎の命日に小、中、高校時代の友人を新宿の「中村屋」に招き、太郎の大好物だったカレーライスを腹いっぱい、何杯でも食べてもらう会を、約十年にわたつて続けた。

この会は太郎の同級生たちが社会へ巣立つていつたために終つたが、毎年、見違えるように大きくなつたましい青年になつていく太郎の友人たちを、森山夫妻はどんな気持ちで眺めていたのだろう。

太郎の死は森山に、生涯消えることのない悲しみの傷跡を残した。これはなにをもってしても癒しようがなかつたが、森山の友人、平原はこういう。

「『長男の太郎君を』くした時の夫妻の悲しみは端で見ていても気の毒だった。しかし、こうい

ては失礼かもしれないが、あのことで、森山君はひとまわりもふたまわりも成長して、人間の悲しみを深く理解したのではないでしようか。政治家というのは人間のいい面を知ると同時に、人間の悲しみを理解しないと、いい政治はできないと思います。云い方は悪いかもしませんが不幸が彼を大きくした。それまでは正義漢で、鼻柱が強く、強情でしたね。この男はちょっと人間の弱い面に気づかないのではないかと、見えて心配になりました。しかし彼はこの事件で人間の悲しみを知り、優しくなりましたね」

妹の真理は太郎を評して、

「彼は、春風のような人であります。そよそよと、春風のようにあたたかでありました」（『太郎』）

と書き、姉の真澄は、

「生真面目で、のっそりとしていて、純粹であるがゆえに自分を否定しがちだった太郎ちゃん。ねえ、天国にいる太郎ちゃん、何をやってもだめだなんて思わないでね。自信を持つてちょうだい。あなたはとても美しい人なんだから」（同）

との言葉を贈っている。まさに太郎はみんなの心に、春風のようなあたたかさを残して天国へ旅だらう。

立つていった。太郎はいまも森山家の人々の心に美しい思い出として生き続けている。きっと今頃、天国の森山と太郎は早すぎた別れを埋め合わせるようにいつまでもいつまでも語り合つてゐることだろう。